

令和4年度 能美市立和気小学校 学校経営具現化に向けた学校評価表

項目		具体的方策	主担当	【評価指標】 〈成果指標〉 〈努力指標〉 〈満足度指標〉	【評価の根拠】 達成度判断基準	前期評価	今後の改善策	学校運営 協議会 による意見	後期評価	成果と課題	学校運営 協議会 による意見
1	組織的な 学校運営	【ロードマップの活用】 学校力向上ロードマップを 活用し、組織的・計画的に 運用する。	竹田	【努力指標】 自分の担当分掌について、 毎月ロードマップを検証す ることで、取組の見直しが 行われている。	【教師アンケート】 「自分の担当分掌について、毎月ロードマップを検証 し、適切な取組となるよう見直しを行った」と肯定的に 回答する教師の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【教師】 A 100％	・教務主任を始め、各主任が2ヵ月先を見通し て各担当への声かけ、計画や打合せなどの連絡 を密にする。 ・三部会で、「C」「A」の具体的方法（いつ、 どこで、どのように）を具現化する。	不登校が 心配される 児童につ いては適 切な対応 を取って ほしい。 業務改善 を進め、 児童のた めの時間 確保に努 めてほし い。	【教師】 A 100％	・各主任が担当者と連携を密にし、ICT活用を工夫した 「C」「A」を機能させ、「やり切る」取組が多く見られ た。また、各担当が取組の目的を全職員で共有するための 手立てを工夫し、その成果が児童の姿に少しずつ表れてき ている。来年度も継続していけるよう、組織的・計画的に 運用していけるロードマップを全職員で作成し、取り組ん でいく。	
		【校内支援体制の充実】 不登校等の未然防止のため の校内支援体制や教育相 談、児童理解の会を充実さ せ、専門組織との連携に努 める。	藤田・室山	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や 各主任が連携・協働し、諸 課題の早期解決・未然防止 に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、校内支援会議を学期に2回 設ける」 A：2回できた B：1回できた C：1回もできなかった	【教師】 A 2回	・校内支援会議によって、該当児童の困り感を さぐり、今後の学校生活の送り方や学習支援の 在り方を検討した。今後、支援員も含め、学校 全体で共通理解と実践を行っていく。		【教師】 A 5回	・来年度も、定期的かつ必要に応じて、校内支援会議を開 催し、該当児童の困り感をさぐり、学校生活の送り方や学 習支援の在り方を検討する必要がある。 ・支援員も含め、学校全体で共通理解と実践を行ってい く。 ・新1年生の校内支援会議を3月に行う。	
		【業務改善】 多忙化改善に向けた取組や 意識改革を推進すると共に 協力・協働による有効な （効率的な）業務遂行を図 る。	教頭	【努力指標】 業務の平準化やワークバラン ス意識の向上に努めると共に 協力・協働による効率的な 業務遂行を図る。	【教師アンケート】 「学校運営において、業務の平準化やワークバランスを意識 し、業務改善に努めた」と回答する教師の割合が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満	【教師】 B 89％	・各種行事・取組について提案時に「なくす」 「減らす」「変える」を意識する。 ・反省を元に来年度の予定を立てておく。 ・行事や取組の反省は、変更点・申し送り等が よくわかるよう赤字にしておく。		【教師】 A 100％	・業務改善を進め、児童のための時間確保に努める意識が 高まっている。 ・各担当が提案時に業務改善を意識して提案されている。 ・行事等の反省を変更点・申し送り等を明記しているので 担当が変わっても、戸惑うことが少なくなっている。	
2	確かな学力の 育成	【授業力の向上】 児童が自分の考えをもち、 表現できる授業をつくる。	永吉	【成果指標】 児童が自分の考えをもち、 表現できる授業をつくるこ とができている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師】「児童が自分の考えを持ち、それを表現できる ように指導している。」と肯定的に回答する教師の割合 が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 【児童】「授業の中で自分の考えを書いたり話したりし て、自分の考えを表現している。」と肯定的に回答する 児童の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 A 87.7％	児童が考えを表現できるようにするために、ま ずは考えを持たせる時間を確保する。さらに、 現在取り組んでいるペアやグループの場を利用 して、表現に抵抗感のある児童への配慮とした い。	児童の学 力向上に 繋がるよ う授業の 内容を工 夫し基礎 基本の定 着を図っ てほしい。 読書に親 しむ環境 と働きか けを工夫 して取り 組みを進 め、読書 好きの子 どもを増 やしてほ しい。	【教師】 A 100％ 【児童】 A 86.6％	・授業では児童が自分の考えを持てるように導入を工夫す るなどしてきたことで、自分の考えを持てる児童は増えて きた。また、ペアやグループで自分の考えを伝え合う場面 を増やしたことで、アンケート「自分の意見や考えをみな に認めてもらっている」の設問に対する肯定的な回答も 多かった。（92.1％） ・今後はペア・グループで出し合った考えを全体の場にど う生かしていくか、授業をコーディネートする授業力の向 上が必要になる。	児童の学 力向上を 図るため に学校運 営協議会 としてお 手伝い できるこ とがあれば、協 力したい。 例えば、 昼休みや 放課後の 学習支援 など。
		【GIGAスクールの推進】 ICTを効果的に活用した授業 構想を立て、実践を進め る。	永吉・稲井	【努力指標】 ICTを効果的に活用した授業 構想を立て、実践を進める ように努めている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師】「1日に2回以上、ICTを使った授業を行っている 」と肯定的に回答する教師の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 【児童】「1日に2回はクロームブックを使って学習し ている」と肯定的に回答する児童の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【教師】 B 75％ 【児童】 A 86.7％	・教師自身も端末を用いた意見交流の利便性に 気づいていけるよう、職員間の意見交流の際に ジャムボードを活用するなどして教師自身も端 末活用に慣れていけるようにする。 ・研究授業ではクロームブックの効果的な使い どころがないかを検討する。		【教師】 A 100％ 【児童】 A 81.8％	・クロームブックの活用が日常的になったことで、前期・ 後期ともに8割程度の児童が日々活用（1日2回以上）し ていると回答した。 ・教師も日常的に端末を活用して意見交流をするなど、端 末の使用に慣れていけるように努めた。	読書の取 組につい ては学年 のばらつ きがでな いように 指導して ほしい。
		【学力の向上①】 AIドリルや帯タイムを活用 して基礎学力の定着、習熟 を図る。	竹田	【成果指標】 単元末テストの平均（知識 及び技能）で （低）90点以上（高）85 点以上 達成した児童の割合が8割 以上を目指す。	【各種教育データ】 単元末テスト（知識及び技能）で低学年90点、高学年85 点以上達成した児童の割合が、 A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【国語】 D 57.4％ 【算数】 C 63.6％	・漢字・計算を粘り強く指導していくととも に、1学期で定着できていないところを各学年 が把握し、AIドリルや帯タイムを活用して定 着・習熟を図る。 ・授業の中で、身に付けるべき知識及び技能を 意図的に活用する場面（特に国語における言語 活動）を設定し、達成感を味わわせるようにす る。		【国語】 D 51.7％ 【算数】 C 64.4％	・国語では、「書くこと」の言語活動においてモデル文を 提示して、書く力が少しずつついてきている。来年度も継 続していく。一方、文章を読み取る力が弱い。算数では、 図や言葉、式など使って考える、表現することで少しづつ 力がついてきている。国語同様、問題場面を読み取る力が 弱い。そこで、来年度は問題文や教材文を読むときに「大 事なこと」「求めること」「根拠となる文」に印や線を引 くなど読み取る指導をしていく。	学校でお すすめの 本を紹介 する取組 は保護者 としては ありがた い。また 、児童が 各自のお すすめ の本を掲 示物など にし、紹 介しあっ てはどうか。
		【学力の向上②】 家庭学習の指導と評価を行 い、家庭学習の習慣化に努 める。	竹田	【成果指標】 家庭学習の指導と評価を行 い、学習時間「学年×10 分」として習慣化を目指 す。	【各種教育データ・教師アンケート】 【教師】「家庭学習の指導や評価の工夫をしている」と 肯定的に回答する教師の割合が、 A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 【児童】家庭学習強化週間で、「学年×10分」学習で きた日が5日以上と回答する児童の割合が、 A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 A 80％	・習慣化できていない児童の把握・共有し、学 校全体で指導方法を共通実践する。 ①保護者と連絡を取り合う。 ②提出できなかった場合にどうするかを明確に してやり切るよう指導する。 ・個に応じた指導が必要な場合は、担任や学力 向上担当、特別支援コーディネーター等と連携 し、個に応じた目標を持って取組、達成感につ ながるようにする。		【教師】 A 100％ 【児童】 A 82％	・各担任が提出状況のチェックや習熟の見取り、評価や指 導の工夫を行ってきた。また、家庭との連携を図り、家庭 で学習に向かう意欲づけも行ってきたことで、やや上向き の傾向である。 ・家庭学習の習慣化は低学年のうちから身に付けることが 大切である。今年度の指導や評価の工夫を来年度も継続 し、基礎学力の向上につなげる。	
		【学力の向上③】 読書活動を充実させ、読書 の質の向上を図る。	稲井	【成果指標】 各学年のおすすめ10冊を1年 間で読むことができる。	【各種教育データ】 「おすすめ10冊」のチェックカードを前期、後期に集 め、検証する。（達成率） 前期…50％以上 後期…100％以上達成した児童の割合が、 それぞれ A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【児童の割合】 D 32％	・教職員への取組の周知を図り、「おすすめの本」 の利用を促す。 ・おすすめの本達成者を表彰したり、季節のイ ベントにおすすめの本を絡めたりするなどす る。		【児童】 C 65％	・イベントによる啓発や担任による声掛けがあり、おすす めの本を達成する割合が昨年度に比べ上がった。 ・低学年のころからおすすめの本にふれることで読書の質 を向上させていく。 ・本を好きになってくれるような取り組みや子ども達が自 ら読み応えのある本を手にとれるよう図書館司書と連携し ていく。達成率：1年（100％）2年（0％）3年（25％）4年 （100％）5年（100％）6年（82％）やまびこ1（50％）やま びこ2（25％）	

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	藤田・野上	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。（児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など）	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「児童が主体的に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が、 A：85%以上 B：75%以上 C：65%以上 D：65%未満 【児童アンケート】1～4年「児童会活動の取組に積極的にさんかできた。」56年「学校をよりよくするために進んで児童会活動に取り組むことができた。」との肯定的な回答する児童の割合が、 A：85%以上 B：75%以上 C：65%以上 D：65%未満	【教師】 A 100% 【児童】 B 83.9%	・前期委員会の任期は、10月初旬までなので、運動会を通して、自分たちの委員会で「みんなのために働く」意欲や行動につなげたい。 また、運営委員会が中心となり児童会の組織と高学年の役割などの説明動画や各委員会の取組のPR動画を作成し、1～4年生への理解と周知を強める。さらに、各委員会の取組で、よかったクラスや児童を紹介し、価値づけていくようにする。		【教師】 B 75% 【児童】 A 86.1%	児童アンケート結果と児童の姿から、各委員会では主体的で創造的な活動が増えたことで児童の自己存在感につながったと考える。ただ、教師アンケート項目や高学年が前期95.1%から後期87.3%に減少した。これは、各委員会の新たな取組が増えたものの、その取組時期が重なったことで教師が児童の参加意欲を持たせられなかったこと、計画する時間が足りず教師から提案されたままの取組を行ったことなどが考えられる。 ・委員会活動について、来年度は、各委員会の取組スケジュールが重ならないように、今年度のうちに開催した取組を一覧に整理する。	
		【ライフスキル教育の推進】 ライフスキル教育の共通実践を通して、児童一人ひとりの自己有用感を向上し、認め合い支え合う学習集団をつくる。	藤田	【成果指標】 ライフスキル教育研修で学んだことやセカンドステップ実践を学級経営や特別活動に取り入れることで、児童がお互いの考えや意見を認め合うことができている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「ライフスキル教育研修で学んだことやセカンドステップ実践を学級経営や特別活動に取り入れている。」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【児童アンケート】低「自分の考えや意見をみんなに聞いてもらっている。」高「自分の考えや意見をみんなに認めてもらっている。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 A 87.5% 【児童】 A 91.3%	・学習集団づくりの振り返りを交流しながら、「自主自律」「みんなのために働く」児童の姿につながる研修を計画し、2学期の共通実践につなげる。ライフスキルが学級経営の一助であることを踏まえ、ルールづくりとリレイションづくりのバランスを大切にしたい内容を取り入れる。 ・コロナ状況を注視しながら、対面型の講師研修を計画する。 ・総合の学習の時間でお世話になった、ゲストティーチャーや地域にお礼をしたり自分たちでできることを主体的に考え実践したりする機会をつくる。		【教師】 A 87.5% 【児童】 A 92.1%	・特に、低学年の数値が伸びていることから、学習面と関連させてペアやグループの活動が増えたためと考える。また、児童アンケート項目「各行事の学校生活のふり振り返り、自他のおよさを感じる。」では、全学年でアップしたことから、行事ごとのふり振り返りが、自己有用感につながっている。 ・3学期の最後に、来年度の求める児童の姿につながるライフスキル研修を実施したい。 ・3学期の行事で、自分たちでどんな姿になりたいかなどキャリア教育と関連させながら、学習集団づくりにつなげたい。	
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫し、考えを聴き合い伝え合う授業づくりを行い、道徳的実践につなげる。	室山	【満足度指数】 児童が道徳の授業で学んだことを生活に結び付けたり生かしたりしようとしている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「授業の終末に自分事としてとらえさせる時間をとることができた」とする教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【児童アンケート】「おうちの人と道徳的価値について話合うことができた」と肯定的な回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 A 100% 【児童】 A 83.3%	・4月当初に提案した、今年度の道徳の取組を再確認し、別葉の活用、教室掲示による見える化、家庭との連携を強化していく。 ・夏休み中に研修会を開き、2学期の道徳につなげたい。また、ゲストティーチャーを積極的に招待し、生きた教材から学ぶことや感じることを大切にし、生活や態度につながるようにしたい。		【教師】 A 100% 【児童】 A 87.3%	・教師アンケート100%、自分事としてとらえる時間を確保する授業が多かったと考える。 ・その結果児童アンケート、学習したことを生活に結び付けていると考える。	
4	健やかな身体 の育成	【体力向上の工夫】 体力アップ1校1プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	清川	【成果指標】 50m走の記録を6月に計測し、それよりも10月には平均で1秒縮める。	【各種教育データ】 【体力テスト①②の結果】 該当学年の50m走の記録が6月の計測時よりも10月の記録が平均で1秒縮めることができたのは3学年中、 A：3学年が達成 B：2学年が達成 C：1学年が達成 D：どの学年也未達成	取組中 【児童】 D	目標設定を児童の実態に合わせたものにするのと、取組自体を児童会活動とつなげると、取組内容がもっと児童に浸透し、意欲・意識の向上や実感をともったものになるのではないかと思います。	全国学力学習状況調査の質問紙調査からも本校児童のメディア利用時間が長いことがわかる。保護者への啓発に努めてほしい。	D	結果をみると春の記録より秋の記録の方がよい学年が多かったが、どの学年も達成することができなかった。分析の結果、「1秒縮める」という目標設定が難しいものであったことが分かった。また、委員会活動などの取組を受けて、体力向上に意欲的な児童がいたためか、個人的な記録をみると春と秋を比較した場合に、飛躍的に記録がよくなった児童もいた。	クロムブックに記録を入力し、グラフ化すると伸びがわかり、意欲に繋がる。 虚空蔵山など周りの環境をうまく活用し体力向上に努めてほしい。 運動しないので、夜遅くまで起きてしまうのではないかな。
		【生活習慣の確立】 「早寝早起き」の習慣化やメディア利用の約束を行い、基本的な生活習慣を確立することで、心身の健康の保持増進を図る。	清川・木戸口	【成果指標】 メディア利用の約束を守り、早寝早起きを定着させることにより、心身の健康が保たれていることを実感している。	【生活アンケート・保護者アンケート】 【生活アンケート】メディア利用の約束を守り、早寝早起きができていると回答している児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【保護者アンケート】8時間以上の睡眠時間（低：9時間、高：8時間）を週に4日以上とることができたと肯定的に回答する保護者の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【児童】 B 70% 【保護者】 B 89.3%	・夏休み中は生活習慣が乱れていることが考えられるため、登校日から生活リズム改善シートの取組を行い、2学期をスムーズにスタートさせられるようにする。また、2学期中にも生活アンケートを行い、メディア利用時間と就寝時刻の相関関係等、生活習慣改善の手立てが児童にもわかりやすいように、おたより等で発信していく。生活習慣はすぐに変えられるものではないため、児童の実態に合わせ、今後も粘り強く、保護者の協力も得ながら継続的に指導していく。		【児童】 C 63% 【保護者】 B 89.2%	・学校保健委員会で「心の健康」をテーマに取り上げ、高学年の児童は思春期の心の特徴や向き合い方について学ぶことができた。 ・多くの児童は生活習慣が心身の健康に結びついていることは理解できているが、そのために生活習慣を改善しようと思えない児童が多い。「今」の生活習慣が「将来」の自分のためになっていることなど、日々の積み重ねが心身の健康のために重要であることを伝えていく必要がある。今後は生活習慣チェックをこまめに実施し、生活習慣の改善に向けて継続的に意識づけを行っていきたい。 ・生活習慣の改善には保護者の理解・協力が必要不可欠であるため、学校保健委員会等を通じて今後も啓発していき	
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとを知り、ふるさとを愛を育む、ふるさと教育を推進する。	教頭	【努力指標】 地域教材等地域の特色を生かしたふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「地域教材等地域の特色を生かした教育活動の推進に努めた」と回答する教師の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満 【児童アンケート】「生活科・総合や地域の方との学習は好きですか」と回答する児童の割合が A：90%以上 B：80%以上	【教師】 A 100% 【児童】 A 92%	・「各学年間の交流をもつ」など実践を発信する。 ・学校だよりやHPを活用し、保護者や地域への発信をする。 ・取組が継続するよう、学年毎の申し送りファイルを作る。		【教師】 A 100% 【児童】 A 90%	・生活科や総合的な学習の時間の学習を通して、ふるさと教育が着実に実践されている。 ・「ふれあい活動」も含め、地域の人々とのふれあいが、児童のふるさとを大切に思う気持ちを育てている。 ・児童がふるさと学習で学んだことを高倉小や他校との交流、いしかわ動物園での発表などで今後も発信していく。	
		【学校運営協議会との連携】 学校支援ボランティアの組織化を進め、教育活動の充実を図る。	教頭	【満足度指標】 学校支援ボランティアにより教育活動の充実が図られている。	【教師アンケート】 「学校支援ボランティアにより教育活動の充実が図られている」と回答する教師の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 A 100%	・ボランティア組織化に向け「登録票作成」し、「コーディネートの仕組み化」を進める。 ・計画的に実施できるよう「年間計画の活用、職員会議等での確認」をしていく。	ふれあい活動や授業の支援などお手伝いできることがあれば、遠慮なく伝えたい。	【教師】 A 100%	・持久走については、コースや立つ場所の確認や雨天時の連絡等課題が見られるが、安全管理上大変助かっている。今後は、コドモンの活用を図りたい。 ・ミシンサポーターなど確実に教育活動の充実に繋がっている。今後とも地域の方のご協力を得るとともに見通しをもった計画的に実施していく。	
		【あいさつができる子の育成】 気持ちよい挨拶ができる子を育てる。	藤田	【努力指標】 児童が相手意識を持って挨拶をしようとしている。	【児童アンケート・保護者アンケート】 【児童アンケート】「学校で「おはようございます、こんにちは、さようならなど」のあいさつを自分からすることができる。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【保護者アンケート】「子どもは地域や家庭であいさつをしている。」と肯定的に回答する保護者の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【児童】 A 91.5% 【保護者】 A 94.7%	・児童会の運営委員会を中心にしたいあいさつの取組を継続して行っていく。よい児童やクラスを放送やグラフで見える化し価値づけていく。 ・学校だよりやホームページなどを通じて、地域や家庭へのあいさつの啓発を行っていく。		【児童】 A 86.0% 【保護者】 A 88.8%	全体で86.0%、運営委員会のあいさつ運動の取り組みをいかし、「自分からすすんで」のところをのばしたい。なぜ自分からするとよいのか、感謝の会を通じて地域の方やお世話になっているかたの感謝の気持ちを持たせたい。運営委員のあいさつの取り組みを引き続き充実させ、だれにでもしあつできる機会をつくりたい。また、あいさつ運動の取り組みのあとに「あいさつを返してもらったときの気持ちよさ」「あいさつを返してもらえなかったときの気持ち」などふりかえる活動を通して、あいさつの価値を広める。	